38
光村
小国 622

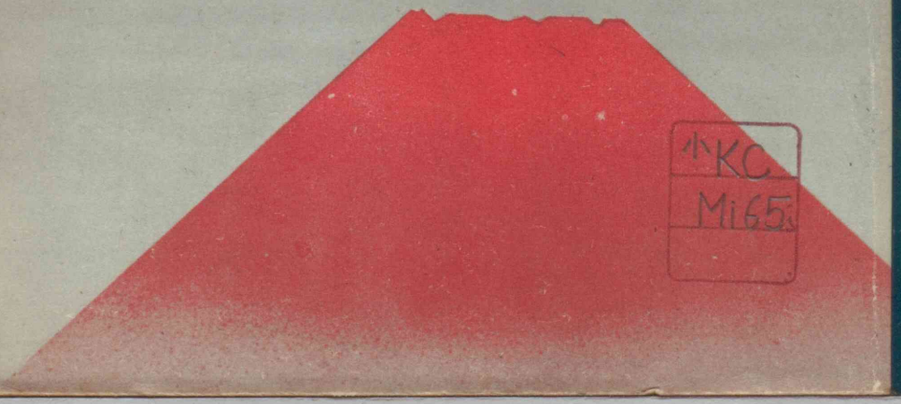
垣内松三 著

教育學部
教科書

新生

新国語 六年 中

文部省検定済教科書



小KC
Mi65

60253
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49808

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449808

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

新生

広島大学図書
0130449808

新国語　六年　中

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

指導者のために

(一) この本は、上巻の趣旨を受けて文化の発達に取材し、自然・人生に対する眞実探求の精神を養いながら、身心の発達に即して国語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動を中心として理解と表現の学習が、興味のうちに有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は次の四つの題目に分かれている。

一、空・海・山
文化と風光に取材して、詩・手紙・紀行文などを提出した。視野を拡大すると共に自省を深化して、自然や文化に対する観方や考え方を養いながら、言語表現の能力を伸ばすことにする。

二、親しき人々
外国人で特に日本を愛した人々の観察を通じて、祖国の風土・文化に対する新たな理解と、これを愛する心を生動せしめながら、言語活動の機能を知り、その教養を高めることにする。

三、眞実に生きる
前課と連関して世界的な絵画・工芸に取材し、会話記録・戯曲を提出した。全力を挙げて一事に集注する人生の態度を通じて、表現と理解の眞相を会得せ眞実な言語活動に導くことにする。

四、新　生
「わか草」から、前課に至るまでの内面的展開して偉大な文学作品に触れしむるとともに、冬にもえ出でる若草のように、眞実に生きぬき文上に努める態度を確立し、長文に対する理解能現能力とを養い、冬休みの国語学習に対する心整えることにする。

(三) この本に提出した新出語は四六九語で、毎ページの新語率は三・九七語である。各課ごとに学習の仕方を示し度の向上に努めるとともに、新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ることにした。

(四) この本のさし絵は、学習上重要な位置を占めるので、特別な考慮が払われている。

(五) この本の使用期間は、だいたい九月から十二月までを目標として、大題目を平均一か月あてとしたが、それを固執する必要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に使用されたい。

（右は本書の大要である。詳細は新国語指導書を参照されたい。）

広島大学図書
0130449808

目次

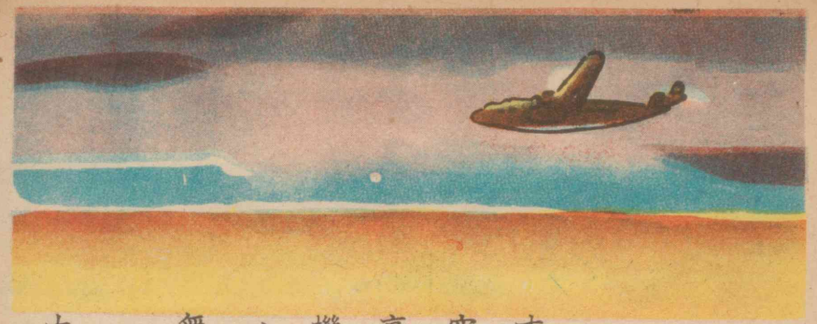
一　空・海・山……4
(一)　空を飛ぶ
(二)　海をわたる
(三)　大火口をいく

二　親しき人々……29
(一)　小泉八雲
(二)　モラエス
(三)　ブルーノ・タウト

三　真実に生きる……60
(一)　かねの音
(二)　さらの色

四　新生……91

新しいことば　漢字表……119



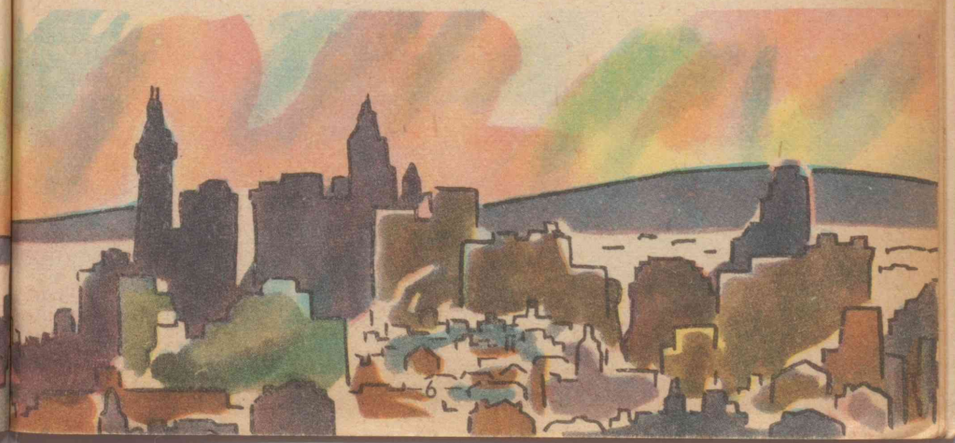
一　空・海・山

(一)　空を飛ぶ

すみわたる秋の空、
空港をはなれて、ゆったりとうかぶ、
高度三〇〇〇メートル、
機首を東に向けて平らかに走る。
時速五〇〇キロメートル、
無線によりて地上と連なる
一条の空路、
大空をつらぬき、

機影はるかに夕もやにうすれる。
空飛ぶホテルのまどのとばり、
夜も明けやらず、残夢あわし。
航程約六三〇〇キロメートル、
うすずみではいたハワイの島かげ
ほのぼの白むホノルルの港、
航空十一時間半余。
このタベ、サンフランシスコを経て
ニューヨークに至る。
週初に空を行けば、世界を一周して
週末に帰る。

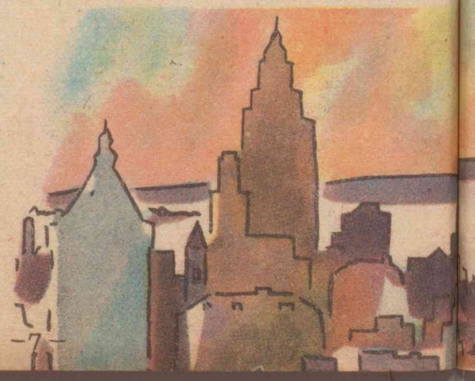
科学と技術をたくみに結ぶ、
左右・上下・前後の均整。
おさなごをいだける母には、
居室の安らぎ。
読書に親しむ人々には、
喜さいの静けさ。
身ゆたかに心定まる、
世のちりをへだてて、機上の生活。
空を行き、空から来る、
人間の活動は速力を増し、



世界の文化は進度を加う。
人類の親しき交わり、
よどみなき文化の流れ。
人類の幸福、世界の平和のために
山をこえ、海をわたりて、
天かける世紀のつばさ。

学習の仕方

一　各節ごとに意味をはっきりと読みとりましょう。
二　全体として何が書かれているか、まとめてみましょう。
三　この詩の感じを、うまく声に表わして読みましょう。
四　この詩を読んで、感じたことを書きましょう。



(二)　海をわたる

よし子さん。

九月九日、羽田から西に向かい、カルカッタで飛行機を乗りかえてロンドンに飛び、十二日、スエーデンに着きました。前年、アメリカから帰る船の中では、日本水泳選手の話ではにぎやかでしたが、ストックホルムでは、ノーベル賞を受けられた湯川博士の話で、かたみの広い気がしました。

それから、デンマルクにいって、ダルガスの偉業をしのび、コペンハーゲンからスイスにまいりました。飛行機のおかげで、用事もはかどり、ヨーロッパもせまくなったような気が

します。

スイスから汽車で、フランスの南東地方を経てパリにきました。十月も半ばを過ぎて、このあたりのおかや林や谷の風景は絵のようでした。パリの秋はひとしおです。ブローニュやベルサイユの方にもいきました。市内の公園はいうまでもなく、なみ木道や花だんなどの手入れもよくいきとどいています。日本でも、公園を愛護するように、みんなで心がけたいと思いました。

これから、また、ロンドンにいきます。

今月の末、マルセーユを出航して日本に向かうフランスの船がありますので、船室を予約しました。十一月の末か、十二月の初めには帰ることになりましょう。

船がホンコンを出たら、無電で着く日をお知らせします。
ごきげんよう。さようなら。

（パリにて）

よし子さん

ロンドンから、飛行機でマルセーユにきて船に乗りました。この船は一五〇〇〇トン、船室三四〇、りっぱな海のホテルです。この手紙を書いている室には、白いかべにセピアで、フランスの田園風景がえがかれています。明るい清らかな感じの室で、わたしはたいていここで書きものをします。

デッキは、長さ二五〇フィート、高さ一一・五フィートで、この室の外に談話室やサロンなどもあります。いずれも美しい歩廊でとりまかれています。壁画や座席に至るまで、海の

旅を楽しくするように、それぞれの室に似合った色を用い、心のこもったかざりつけがしてあります。

この上のデッキには、日光浴室やプールなどもあります。午後はここで運動をします。スポーツのなかまもできました。子ども室もあって、自転車や木馬なども備え付けてあります。専属の女の人がふたりいて、子どもたちを遊ばせたり、絵本をあたえたり、合唱やダンスの世話をしたりしています。

船室の設備は、ホームそのままの延長で、簡素で清純です。それに、時々、コンサートがもよおされたり、ラジオやレコードも聞かれます。

この船は壁画のほかに、地中海の風景や古跡をえがいた、みごとな絵でかざられています。

秋深い地中海の風光は、あわただしく飛行機で飛びまわったつかれを休めてくれます。また、ぐっすりとねむらせてくれます。それでも、緑地計画のゆめをみていて夜半に目をさまし、海の上だと気づいておかしくなることもあります。では、また、お便りしましょう。さようなら。（ポートサイドにて）

よし子さん。

船は、インド洋を走っています。このごろは、朝早く運動をすることにしています。午前はノートの整理に当り、午後の数時間を談話室で過ごします。

日本へ来る人が意外に多く、その人たちと話しあうのが楽

しみです。公務を帯びて東京にいくというイギリスのわかい婦人で、日本の言語や文学や美術に関する知識の豊かな人がいたり、はに輪や法隆寺の話をするフランスの実業家がいたりして、その教養の深さにおどろきました。そして、日本文化について、自分の勉強のたりなさを深く反省させられました。

きのう、お茶の時間に、日本の風景の話を求められて、国立公園の話をしました。

読書室から、日本観光案内の書物を取り寄せて、その地図や写真を中心に、北は阿寒・大雪山から、南は阿蘇・霧島・雲仙まで、それぞれの国立公園が、日本の代表的な風景であることをくわしく話しました。

最後に、日光や富士箱根の国立公園は、風景も雄大であり、交通その他の便利もいいから、ジュネーブやストックホルムやコペンハーゲンなどのように、世界の平和や人類の幸福について協議をする国際会議の会

場として最も適当であること、われわれ日本国民は世界の友だちを歓迎するじゅうぶんの用意があるむねをつけ加えて、話を結びました。

みんな、はく手をしてくれました。日本に帰る日もだんだん近づいてきました。では、ごきげんよう。（シンガポールにて）

学習の仕方

一　三つの手紙がそれぞれ何を書いたものか、どんなつながりをもっているかに気をつけながら学習しましょう。

二　この文を中心にして、地図・写真などによってくわしく調べましょう。

三　この文を読んで、感じたり考えさせられたりしたことを書きましょう。

四　この文が、ほかの課と、どんな関連をもっているかを考えましょう。

五　「平和日本」を話題にして話しあいをしましょう。

(三)　大火口をいく

朝七時、熊本発の汽車に乗りこみました。父といっしょに阿蘇登山をするためです。汽車のまどからながめると、野も、田も、林も、みんな朝日にかがやいていました。

大津町のあたりから、道の両側に大きなすぎの木が、たくさんならんではえていました。あまりたくさんならんではえているので、父にたずねますと、

「あれは、むかし、加藤清正が、ここを通る人のために植えたものだ。」

と、教えてくれました。

夏の日に旅をする人も、馬も、この木かげで休んだことでしょう。また、大名の行列も、この美しいすぎのなみ木の下を通ったことでしょう。

父は、清正は武勇にすぐれた人だといい伝えられているが、むしろ、土木工事の大家で、人間性の豊かな人であったと語り、それについて、おもしろい逸話や物語をしてくれました。

汽車が火口瀬にさしかかると、だんだん上り坂になり、右手は深い谷あいとなります。その下を、白川が細く白く流れているのが見おろされます。川の流れを、こんなに上から見おろしたことは初めてです。この前、九州地方の模型地図を作った時、高い所から、山や町や海などを見おろす気持になったことを、ふと思いだしました。

立野駅を過ぎると、汽車は、スイッチ・バックをしながら登らなければならないほどになりました。

南にそびえる山々が、あるところは朝日を受けて明るく、あるところは暗くかげっていて、絵を見るようでした。木の間から、たきの落ちるのも見えました。温泉場だとみえて湯けむりのたっている所もありました。

きれいにそめた布地を思わせるようなけしきの中を、汽車はぐんぐん登っていきます。阿蘇の五岳といわれる、

えぼし岳や、きしま岳などが、ぬっくと見えだしました。これらの山々は雑草におおわれていて、遠くから見ると、ちょうどオリーブ色のじゅうたんでもしいたように、やわらかに見えました。

中腹に火山研究所がありました。こんなところで、学問をしている人たちのとうとい生活を考えて、五年で読んだ乗鞍岳山上のコロナ観測所を思いだしました。

下野狩場のあとを過ぎると、ようやくなだらかになって、汽車もほっとしたようにして走ります。ここまで来ると、阿蘇の五岳が、みな勢ぞろいして、わたしたちをむかえてくれました。

五岳というのは、前に書いた二つの山のほかに、高岳、ねこ岳、中岳を合わせていうのです。

ここで、中岳からたちのぼる噴煙をみつけました。今までに、絵や写真で噴火山を見たのですが、こんなに近いところから、ほんとうの噴煙を見るのは初めてです。噴煙は、茶色か黒だろうと思っていましたら、全くちがっていました。まっ白でした。あまりまっ白なので、けむりという感じはしません。それが、よく晴れた、まっ青な空をはい景に、もくもくと、光さえ帯びてたちのぼっているのでした。

汽車が坊中駅に着くと、そこで下車し、登山バスに乗ることにしました。

バスは、すぎなみ木の間を走り、木の間をくぐって、勢いよく登っていきます。バスガールが、はっきりとした声で説明をしてくれますので、あたりのけしきがよくわかりました。次の

ような説明の文句です。

「ここ坊中は、大阿蘇火山の登山口、海ばつ五百余メートル、頂上の高さに比べれば、ほぼ四合目に当ります。」

「今登りいくこの道は、延長十五キロの観光路、道の平均こう配は十九分の一と申します。」

「はるかかなた——中岳の前に立てるは、ならお岳、その東なる谷間には、清水がこんこんわきいでて、よう岩るいるいたるその中の、清き流れにかげうつす高山植物の美しさ、この世ながらの別天地、仙酔峡と申します。」

調子がよくておもしろいので、わたしも覚えてしまいました。

一秒、一秒、バスの位置は高くなり、そのたびにひらけていく眼下の風景は、パノラマをくりひろげていくようでした。

ことにきれいだと思ったのは、「草千里」というところでした。ここは、周辺がおかに囲まれている広々とした草原で、その中ほどに池のような水たまりがありました。水には、青い空がうつって、草の中にはめこんだ鏡のように見えました。

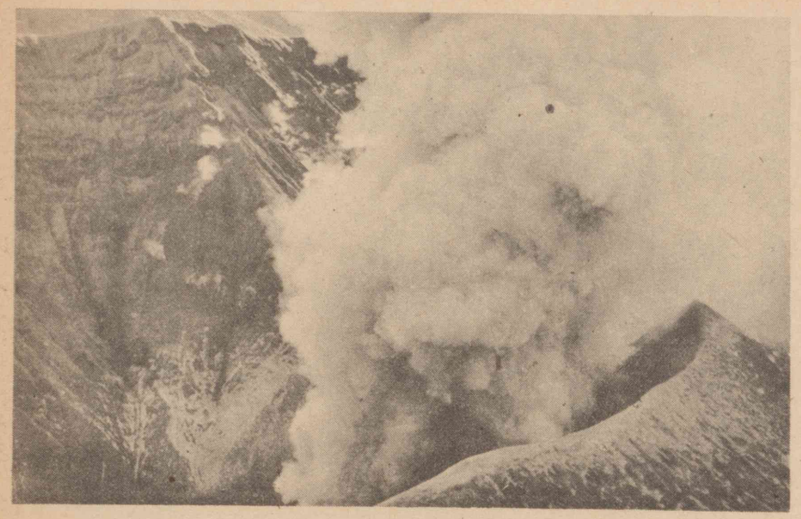
ここには、春から初秋にかけて、放牧の牛や馬の群れが水を飲みに来るそうですが、どんなにいいけしきだろうと思いました。

バスは、いただきに近いところで止まりました。

そこからは、いただきまでよう岩が続いていました。よう岩は茶かっ色で、流れだしたように波のしわがついていました。

二十分ほどで、いただきに登り着きました。

目の前にたちのぼる噴煙。



そばで見る噴煙は純白に光り、かげったところはうすむらさきでした。

大きく口をあけた、底の知れない噴火口。

わたしは、そのものすごいながめにぼうっとしました。

風がふいてきて、噴煙が少しななめにたおれかけました。すると、そのかげぼうしが、むこうのがけに黒黒とたおれかけました。

「地軸」ということばを、ふと思いだしました。

火口に、黄色なものが花のようについていました。父にきくと、ゆ黄だということでした。

ふりかえって、西の方を見わたしますと、えぼし岳がま近に見え、そのむこうに熊本の平野が広がり、遠く金峰山がそびえていました。

「金峰山のむこうに、うすく見える山があるだろう。あれは、島原半島にある雲仙岳という山だよ。」

と、父が教えてくれました。そして、

「こんなに遠くまで見えることはめったにない。きょうは、ほんとうによく晴れている。よかったな。」

と、いいました。

北の方を見ると、きしま岳や往生岳を前にして、阿蘇谷がひ

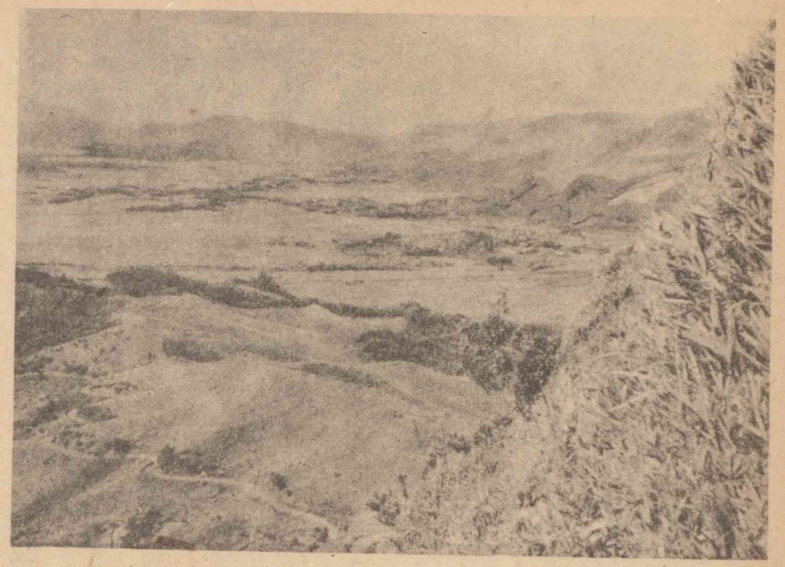
ろびろとひらけていました。

その周辺を、外輪山が低いびょうぶのようにとりまいていました。そのむこうは、青々とうねっている筑紫山脈の連山でした。父は、

「大きなながめだなあ。」

といって、両手をぐっと上にあげ、深こきゅうでもするようにしました。わたしも思わず、手を上にあげて息をむね築くすいました。すると、心もからだも、広く大きくなったような気がしました。

「もし、この阿蘇が噴火しなかったら、ここらは海であったかもしれない。瀬戸内海がここまで延びていて、九州が北と南の二つの島に分かれていただろう。阿蘇が、ぼかんと大噴火



をしたので、南北の九州が一つになったといわれている。」

もと、この噴火口は、富士山くらいの山であったこと、それが一どにふきとばされてしまったこと、当時のよう岩が九州各地に見られること、そのあとがだんだんうずまり、平らになって、いつしか人も住みつくようになり、今のように町もでき、鉄道もしかれて、大火口をいききすることになったことなど、父が話してくれました。

父の話が、あまり大きな話であり、また、あまり大むかしの話なので、ちょっとわかりかねました。しかし、自然の力というものや、年月の大きな流れ、それに比べて、いかにも小さな人間のすがたを、感じないわけにはいきませんでした。

どこかの小学生たちが、ふもとの方から登山してきました。その列が小さく、地べたにさいた一すじの草花のように見えました。

ここでは、何一つ音がしません。耳が遠くなるような静けさです。上を見ると、噴煙の手前をからすが二わ飛んでいました。

「かあ、かあ。」

と、二声三声鳴きました。生きものの声を、なつかしく、また、いとしく聞きました。

まぶしいほどまっ青な西の空に、木版画で見たようなうろこ雲が、ちょっぴりうかんでいました。

帰りがけに、父は持ってきた写真機で火口を写し、噴煙をはい景にしてわたしを写してくれました。代って、わたしが父を写しました。

学習の仕方

一　前の課とのつながりを考えながら学習しましょう。

二　風景の見方、それの書き表わし方に注意をしながら読みましょう。

三　風景の書き表わし方で、とくにいい文だと思うところを書き出しましょう。

四　この文を参考にして登山したり旅行したりした時のことを、作文に書きましょう。

五　この文を中心に「国立公園」を話題として話しあったり、書いたりしましょう。

二　親しき人々

わたしたちは、自分のことは、自分が一番よく知っていると思いがちです。けれども、ほかの人に、自分のことについて何かいわれて、なるほどと思い当ることが、しばしばあるものです。——といっても、ほかの人の人がらや性格、特ちょうなどは、そうやすやすと見いだせるものではありません。それには、親身になってみつめるだけの熱意と注意とがともなわなければなりません。

その人に近づき、その人と親しみ、その人を愛して、初めて、これができるものと思います。

このような人から教えられたことや、注意されたことは、自分のむねにひびき、身にしみ、わすれることができません。また、今まで気づかなかったことに気づき、新しい自分を見いだし、反省させられ、自覚をうながされて、より高い生活をするようになります。

これは個人の場合のことでありますが、大きく一国の場合にもあてはまるものではないでしょうか。

自国のこと、――歴史、芸術、学問、風習、人情などのことは、他国の人よりは、その国の人がよく知っていると考えているのですが、必ずしもそうでないことは、個人の場合とよく似ています。

むしろ、よその国の人々によって、自国人の気づかずにいた

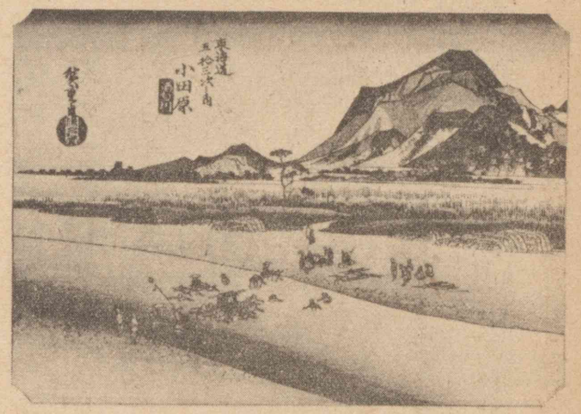
もの――よきにつけ、あしきにつけ、――が発見されることがあるものです。

ただし、これも、す通りする旅行者にはむずかしく、やはりその国のものに愛着を感じ、あこがれともいうべき情熱をもっていてこそ、独自なものを拾い上げることができるのだと思います。

今までに、日本のことに関心をもち、これに親しみ、広く世界にしょうかいしてくれた外国人たちはなん人もあります。

フェノロサもそのひとりでした。

かれは、アメリカの美術学者でしたが、明治初年に日本にわたり、日本の美術品を新しく見直してくれた恩人であります。かけがえのないわが国の貴重な美術品、――ちょうこくや絵画、



工芸品が、いたずらに諸外国に流れていこうとするのをみつけて、この無知なしわざを止めてくれたのでした。

また、江戸時代の木版画の価値を見いだして、そのすばらしさをわが国の人たちに、はっきりと示してもくれました。もし、フェノロサの助言がなかったら、日本の美術品はどうなっていたことでしょう。

そのころ、日本に滞在していた科学者モースも、そのひとりでした。

かれは、アメリカで、ある種の貝について研究をしていたの

ですが、日本のものも調べてみたいといって、一八七七年にわたってきました。江の島の、ある漁夫の家の一室を借りて、研究をしていました。

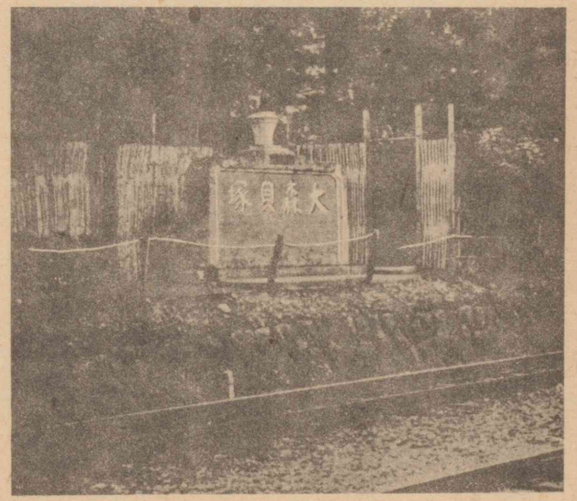
東京大学で、モースを動物学の教授によびたいということになったので、一どアメリカに帰り、家族をつれて再び来朝しました。こうして二年間、その講義をしてくれました。

名は大学といっても、そのころはまだいろいろな学科が欠けており、動物学もその一つでしたが、モースによって初めて設置されたわけです。モースは講義のほかに、採集の方法や標本の作り方なども教えてくれました。

また、かれは、北は北海道から、南は九州まで、よく採集旅行をし、観察したところをスケッチとノートに収めましたが、

後に刊行された「日本その日その日」という書物は、これがもとになったものでした。

モースの残した大きな足あととして、大森の貝づかがあります。これはそれまで、日本人に全く知られていなかったのですが、かれによって初めて見いだされたものです。



かれの手記に、次のようなことが書かれています。

「横浜に上陸して数日後、初めて東京へいった時、線路の切割に貝がらのたい積があるのを、進行中の汽車のまどから見て、

私はそくざにこれをほんとうの貝づかだと思った。私はメイン州の海岸で貝づかをたくさん研究したから、ここにあるものの性質もすぐ認めた。私は数か月間、だれかが私より先にそこへいきはしまいかということを絶えずおそれながら、この貝づかをおとずれる機会を待っていた。」

モースが日本のためにつくした功績はじつに大きく、帰国してからも、いつも日本と日本人とを愛し、日本を世界にしようかいしてくれました。

一九二五年、セーラムの自分の家で静かに永みんした時、友人のコンクリン博士は、

「先生の死で、世界は著名な学者を失い、日本は最良の親友を失い、また、知人は楽しき、愛すべきなかまを失った。」

といったということです。

この人たちのほかに、五年生で学習したクラークもそうであり、ベルツやケーベルもそうでありました。次の三人、小泉八雲、モラエス、ブルーノ・タウトはとくにわすれることができません。

(一)　小泉八雲

小泉八雲は、もとの名をラフカディオ・ヘルンといって、一八九五年に日本に帰化したイギリス人です。父はイギリスの軍医、母はギリシャ人でした。

十九の時にアメリカにわたり、電報配達やホテルのボーイなどをして働き、その後、新聞記者となるにおよんで、その文学的才能が認められました。そのころ、仏領西インドにわたって、美しい熱帯の紀行文を書きました。それからヘルンは、さらに東海の日本のことを書くために、アメリカから派遣されたのでした。

ヘルンが横浜に着いたのは、一八九〇年の四月、さくらがさくころで、しばらく滞在するつもりでしたが、きてみると、日本のいろいろなものが、ヘルンの心をとらえました。

そうして、日本をほんとうに知るためには、少しの滞在ではむずかしいと考え、おちついて生活をしなければならないと決心をし、自活の道をたてることにしました。

島根県松江の中学校の英語教師になったのは、そのためでした。おちついて生活を始めてみると、いよいよ日本の生活や風物が気に入り、とうとう小泉節子をむかえて夫人とし、名を「小泉八雲」と改めました。

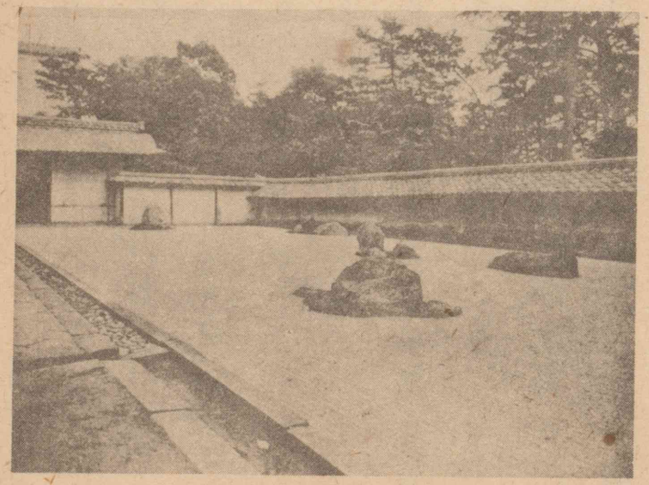
教え子たちも、土地の人たちも、「ヘルン先生」といってしたっていましたが、熊本の第五高等学校に転任しました。ここで三年ほどくらしてから神戸に移り、英字新聞の記者になりました。

それから、一八九六年の九月、東京大学の講師となり、七年間にわたって英文学の講義をしました。そのころから、からだをそこねていましたが、一九〇四年の九月、急にこの世を去りました。

日本にきてから十四年の間に、八雲は日本のことについていい

ろいろな本を書きました。「知られぬ日本のおもかげ」・「東の国より」・「心」・「影」・「日本おとぎばなし」など、いずれも日本を愛したかれの心情をうかがうことができます。

八雲の心をひいたものはいろいろありますが、その一つに庭石があります。庭に置かれた石を見て、その美しさにみとれました。人間の手で切り出した石ではなく、自然のままになっている石をこのみました。石には性格があり、調子があり、明暗があるといいました。東洋の美を象ちょうしたかのような石を理解する



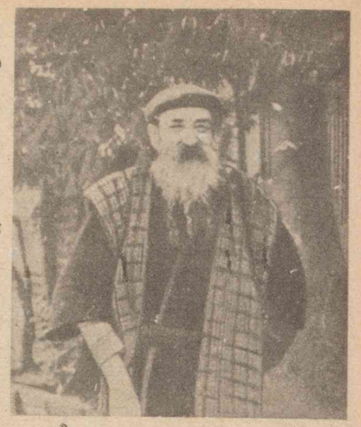
外国人はまれであります。

さくらの花も、その一つでした。さくらの花は、ヨーロッパのどんな花よりもはるかに美しいと八雲はいっています。

そのほかに、かれのすきなものに、石だんがあり、夕やけがあり、虫があり、墓地があり、浦島太郎があり、手ぬぐいがあり、庭がありました。

いかに、かれが日本のものがすきであったか、その一例として次のような話があります。

熊本の高等学校へ転任したころ、学校では宿舎に外人用の洋館をあてたのですが、かれはこれをことわって、日本家屋を選びました。家では和服を着、きせるでたばこをすい、平素の生活は、全く純日本風であったということです。



(二) モラエス

モラエスは、ポルトガルの首府リスボンで生れ、長じて海軍士官になり、ずいぶんあちこち歩きまわりました。エジプト・コロンボ・シンガポール・バンコック・サイゴン・中国・ジャバ・チムールなどにわたっています。

一八九六年の春、モラエスは公務を帯びて日本にきましたが、これは、初めての日本訪問ではありません。最初おとずれたのは、それより三年ほど前のことでした。

長崎に着き、それから東京に向かいましたが、そのとちゅう、

よく晴れた富士山を見ました。この美しさが、モラエスの心を強くとらえたといいます。かれは、日本の自然の美しさにひかれ、だんだんとその風俗や人情にも関心をもち始めました。

その時、にわかに本国から帰国命令がきました。もし帰らなければ失職することになるのでしたが、モラエスは帰ろうとはしませんでした。故国には老母と妹がいましたが、それでも日本を去ろうとはしませんでした。

とうとう、モラエスは公職を失ってしまいました。

モラエスも、ヘルンと同じように日本の婦人をめとりました。

モラエスは正直で、うそをつくことができなく、かざりけのない、やさしい人がらでした。

しかし、幸福な生活もつかの間、まもなく妻に先だたれ、重なる不幸のために、かれはこの世もいとわしくなり、いなかで静かな生活をすることに心を定めました。海軍中佐の位も、総領事の職もすて、恩給や一時金もみなことわってしまい、勲章などは友だちの子どもにおもちゃとしてあたえました。

モラエスは、出雲に移り住もうと思いました。それは、出雲の人が外国人を親切にしてくれるということを、小泉八雲の文章で知っていたからであります。けれども、急に四国の徳島にいくことになりました。

そこで、数千さつの蔵書もくず屋に売り、わずかの書物をたずさえて、一九一三年の七月徳島にわたりました。モラエスが徳島に移ることになったのには、いろいろなわけもありましょうが、まだ欧風化していない日本固有のすがたの残っている土地を、さがしていたことにも一理がありましょう。

はたして、徳島はモラエスの気に入りました。

かれはここにきて、

「自然のおだやかさが、人間の気質をおだやかにしているばかりではなく、人間の顔かたちまでおだやかにしているのだ。」

と、いっていたほどでした。

けれども、晩年はさすがにさびしいくらしでしたので、それをなぐさめるように、毎日なき妻の墓地をたずねました。生き

た人に友だちがなければ、死んだ人と語るよりほかに道がないといっていたそうです。

一九二九年の七月、ただひとりぽっちでこの世を去っていきました。わが日本をかくまで愛してくれた人、日本の長所を世界にふいちょうしてくれた文人の最期としては、あまりにもわびしい死でありました。

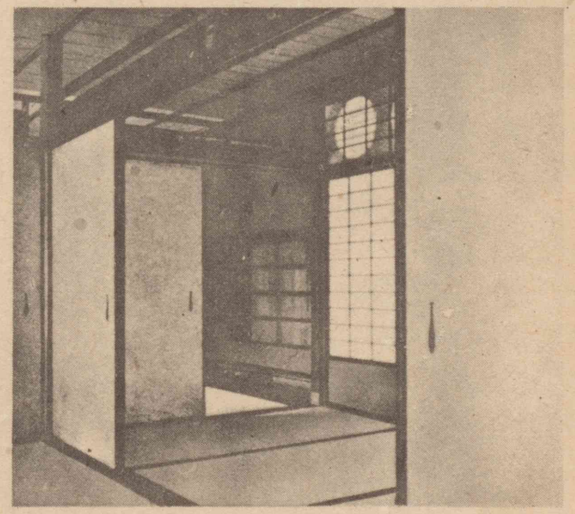
モラエスの書いたものでおもなものは、「大日本」・「日本での生活」・「茶の湯」・「支那と日本との風物」・「徳島の盆踊」・「日本の異国情調」・「日本よりの手紙」などであります。

これらの中には、日本のことばや歴史、家庭生活、日本人の愛情や死のことから、着物、建築、美術品、もみじ、きく、手紙、千代女の句、宇治、いろはたとえ、紋章、おとぎばなし、

おどり、へびなど、日本の横顔がつづられています。

次の一文から、どのようなかれの心がくみとられるでしょう。

「市内やいなかを歩きまわる。どこにも芸術がある。店頭の道具類のやさしいならべぐあいまでが芸術だ。これらの道具の、どれもこれもが、たとえば、子どものおもちゃが国民的典型的な特質を保存しているなら、おもちゃといった、ほんのつまらぬ物までも芸術である。瀬戸物専門の店に売っているありふれた容器類を見ると、竹



の手のついた茶びんも芸術だし、細かな模様のはいった小さいちょくもそうだし、まるい火ばちもそうだし、いろいろなかっこうをして、時には、まるで、なんか虫が食べでもしたように欠けた木の葉の形をしたさらや茶たくもそうだ。

じつにおどろくことは、だんぜん均整——自然はたいていそれをはなれている——をきらうことで、自然が日本人の芸術的霊感を非常にさかんにしている。

その他の店舗でも、たとえば、せんすとか、ほうきとか、ち

りとりとかの、ありふれた道具も芸術である。
市内をはなれて、いなかにはいると、道路のおもしろいかっこうが芸術的だし、耕作の有様も、かんがいのようすも、いなかの住居もそうである。
宿屋で休むと、受ける歓迎が芸術だし、通されたへやもそうだし、ちらっと目にうつる小さい内庭も、出される食事も、そうだ。」

(三) ブルーノ・タウト

この人のことを書く前に、かれの妻エリカ・タウトの書いた一文をかかげます。

「なくなりました夫が、あれほど愛し、尊敬しておりました日本、また、夫の生がいを最も豊かにしてくれました日本、その日本を知る上に、いろいろご親切な手引きをしてくださったお友だちのみなさまに、ただいま、夫に代りましてお礼を申しあげます。
夫の全生がいを通じまして、夫にこのような心の富をおくり、深い感銘をあたえ、夫の心を動かしたものが、他にあろうとは私には思われません。なき夫の追憶を心に守り、深いご好意をお寄せくださいますみなさまに、私はなんとお礼を申してよいかわからないのでございます。
夫はもはや、この感謝の意を、口ずからお伝えすることはできませんが、この思いは、ちょうどトルコにおいて着手した

ばかりの、新しい大きな建築の上に表われていると確信いたします。それに表われている建築の技術は、夫の以前のものに比べますと、まことにあらわな日本の影響を示しておりまして、――それはトルコと日本――ヨーロッパとアジアとの統合体と申すものでございます。

生きて再び日本の地をふむことはないだろうと考えますことは、夫にとりまして、いかにもたえ難いことでございました。しかし、夫はどこへ参りましても、夫が知りました日本をその地に広めようと努めておりました。夫の努力は、もとより芸術的文化的領域で行われましたものでございましたが、それが、いささかなりとも日本および日本人の心理をよび起すのに役だったであろうと私は信じております。

また、日本の美しさやよき伝統は、日本の家屋の中に生きているということを夫は強く信じ、これからの住宅問題と、それに結びついたいろいろな複雑な問題の解決についても、夫はこの上ない喜びを見いだしたでありましょう。

しかし、日本の方々の強い精神力と洗練された観察眼によって、日本の、国民的な懸案につきまして、きっとよき解決を見いだされるでありましょうと深く信じております。

かんたんではありますが、なき夫に代りまして、厚くお礼を申しあげるとともに、日本の文化の美しい花が、世界にさく日の来ることを心から望んでおります。

一九三九年　三周忌にあたり。」

ブルーノ・タウトは、ドイツの世界的建築家でありました。建築学の学者というよりは、むしろ、建築家としてその名が知られており、その著書も少くありませんが、その作品の方がはるかにすぐれているといわれています。

ブルーノ・タウトは、一八八〇年、プロイセンのケーニヒスベルグに生れ、わかいころ、コンクリート工をしていたが、その後建築を専攻して、ベルリンでは大規模な建築を数多く計画経営し、ここの工業大学で講義をしました。

一九三三年五月、夫人と共に日本をおとずれ、そのするどい、しかも教養の高い目で、日本の造形面をながめました。すぐれた人の直感は、凡人の百考にまさるといいますが、ブルーノ・タウトの書かれた文を読むと、まことにその感を深くし、今ま

で気づかずにいたわが内なるものを、取り出して見せられたように思います。

一九三八年十二月、トルコのイースタンブールで急死されましたが、日本建築にあたえた暗示と功績とは、いつまでも消えることはないでしょう。

次に、かれの文章をかかげ、その心境をたどってみましょう。

「いささか、私事にわたるが、私が二十才の青年のころ、日本原版の刀のつばやきれ地など、安価な図案をとり寄せたり、日本の色刷版画を熱心に調べたりした。が、それは、決してそれらを模写せんがためではなかった。

以前、私はなん週間も森の中にある湖の岸にこしをおろして、

風のために水面に起るさざ波や、波のさまや木々のうつるさまをながめていたものである。

秋には、もみじにいろどられたじゅうたんのような森のすがたを観察し、冬には、雪の中から頭を出しているかれ草をこく明に写生し、ほりわりの氷を長い間のぞきこんでは、それをスケッチしたり、えだの分岐の法則を知ろうとして、さまざまな木の成長状態を注意したり、森の立体的な形態を観察したりしたが、これらの一切は、ただスケッチするだけのためではなくて、自然の法則を発見し、同時に、そこから、新しい建築の均整に役だち得る法則を見いださんがためであった。

古い様式のものは、もはや新しい工業の時代に適応しなくな

ったので、均整の法則のためのよりどころとなるべきものは、自然以外にはなくなったのである。色彩の調和についても、私は同じようなことを試みた。

かくのごとくして日本はあこがれの的となり、日本への旅は最も楽しい念願であった。が、それはばく大な費用を要するため、ついにゆめに、とどまらざるを得なかった。

——後になっても形は異ってはいるが、ヨーロッパへの日本の影響はやはり絶大であった。今日の近代建築が世に出たころ、すなわち一九二〇年前後に、ヨーロッパ住宅の簡素化に最も強い推進力を加えたのは、大きなまどや戸だなを持ち、全く純粋な構成を有する、簡素にして、自由をきわめた日本住宅であった。

こうして、日本は、多数の現代芸術家にとって、なお今日も、相変らずあこがれの的であり、しかも、日本文化を解剖することによって、ますますその思慕の念は強められたのである。」

「奈良にせよ、また、京都とその近郊の数々の建築場、ないしは同じ様式の流れをくむ鎌倉のそれもまた、日本が仏教の影響を処理してきた、そのせんさいな、しかも、

なお独自の力に燃えるようなやり方を見ると、興味が深い。

この種のものの極致は法隆寺である。それらのすべては、あの外人向きの名所と化したようなものの、へんりんだに持ってい

ないのである。

桂離宮と同時代に築かれた日光は、日本建築の見方に最後的な決定をあたえるものである。この見方は外国人としてばかりではないと私は信じている。

桂離宮は、日光とその選を異にする。これは、世界に二なきものである。それは純粋の日本であり、しかも、かかる純粋の日本が、日光と同時代に造られたということからしても、驚嘆に価するのである。

それは、日本が当時にあって、支那と朝鮮の強い影響をよく自覚し、文化の一新時代を画するところの力を有していたという点で、じつに世界的な業績である。

だが、小堀遠州は、いかにしてかかる偉大な仕事をなしとげ

得たのだろうか。私は大徳寺なるかれの墓前に、しゅくぜんとしてたたずんだ。」

学習の仕方

一　「前文」「小泉八雲」「モラエス」「ブルーノ・タウト」の一つ一つについて学習しましょう。

二　この文に出てくる外国人の名と、その人たちが日本のどんなところに心がひかれたかをかいつまんで書き出しましょう。

三　四つの文ごとに、読んで感じたことを書きましょう。

四　日本の生活、風俗、人情、建築、学問、芸術、などについて、新しく気づかせられたことをまとめてみましょう。

五　この文を読んで、日本人として反省させられたことを話しあいましょう。

六　日本を愛した「親しき人々」についてもっと調べてみましょう。

七　外国人に対する心がけについて話しあいをしましょう。

八　「文化日本」を話題として話しあいましょう。

三　真実に生きる

(一)　かねの音

先生　これがミレエの名作、「晩鐘」という絵です。よし子さんが、この絵について作文を書いているが、話しあいの前に、まず、その一節を読んでもらうことにしよう。

よし子　では、読みます。

――広い野のむこうに夕日が落ちかかっている。ぼうしをぬいだ農夫と、むねに手を組んだその妻が、真心をこめて感謝の祈りをささげている。この絵をみつめていると、画面にえがかれている遠い村里の教会から、私の耳にもかねの音が聞えてきそうな気がする。「晩鐘」、いかにもしっくりとした画題である。

夕日の光は女の青い前かけを照らし、男のせにかがやき、手おし車の上に照りかえっている。なんとつつましいふたりのすがたであろう。まじめな、幸福な、日常の生活までが、この絵に表われているように思う。――

先生　そこまでよろしい。よし子さんの感想について、どう思いますか。

久　この絵に対する見方がたいへん深くて、いい文だと思いま

す。

先生　と、いうと――

久　この絵を見て、画面の人物の日常生活まで想像しているところです。

定男　よし子さんの見方も深いが、絵がいいから、そのように、見る人にせまる力をもっているのではないでしょうか。

先生　そうだ。どちらもいい意見だ。ただ、見る者の立場からいえば、見方が浅いと、せっかくの名画もその価値を見失うことになるから、もう少し細かに見ていくことにしよう。みどり土につきさしてある農具や、ころがっているじゃがいもなどを見ると、今までこのふたりが何をしていたかが、よくわかります。じっとしているふたりのすがたの中にも、農

夫としての動きが出ています。

正雄　そうだね。お祈りが終ったら、このふたりはそこらのいもを拾い集め、手おし車のふくろにつめたり、かごに入れたりして、子どもたちの待っているわが家へと帰っていくだろう。そんな、これからの生活までも見える。

定男　そのような動きは人物だけじゃない。広い野はすみずみまでほり起され、ほし草が積みあげられて、農夫の働きが書きこまれている。よし子さんの文の中に、幸福な生活ということばがあったが、幸福な生活というのは遊んでくらすことではない。働く苦労と共にあるのだという、そんな感じをこの絵から受けます。

よし子　まだ、調べてはいませんが、ミレエの絵を見ているうちに、

この画家は農夫を深く愛し、その生活に親しんでいたのではないかと思いました。

久　ぼく、ミレエの小伝を書いた本を持っています。ここに持ってきていますから読みましょうか。

先生　そう、では、それを読んでもらおう。

久　ジャン・フランソワ・ミレエは、一八一四年、フランスの西北海岸のさびしい農村に生れた。父も母も教養のある、ゆかしい品性の人たちだった。祖母は博識の上に愛情に富んだ人で、ミレエの一生に大きな力をあたえた人だという。それに宣教師をしているおじもいて、精神的にミレエを指導したということである。

ミレエは小さい時から読書が好きだった。それに、画家と

しての素質はそのころから芽を出していた。書物の絵を書き写したり、けしきを写生したりしていた。父は、早くからその天才を見ぬいていたが、生計が思わしくないので田畑の仕事を手伝わせていた。

ミレエが十八才の時、いつも見かけるこしの曲がった老農夫のすがたを、かべに木炭で書いたことがある。この絵は村でも評判になった。そして、父を深く考えさせ、その決心をうながした。父は二十才になったかれをつれて、近くの町にひとりの画家をたずね、わが子の将来をたのんだ。画家はその才能におどろき、快くひきうけてくれた。それから二か月ほどして、父の急死に会ったミレエは、しばらく家に帰って父の代りに母を助けて働いた。しかし、祖母

を初め、周囲の人々のすすめで、再び町に出てきて絵の勉強にはげんだ。

二十二才、志をたててパリに向かい、ルウブルの美術館をたずねて、前々から見たいと思っていたミケランジェロを初め、偉大な画家の作品に接して、心を奮いたたせた。

先生その次を、みどりさん、読んで。

みどりパリでは、ある一流の画家のアトリエで絵を習うことにした。なかまはいなか者がきたというので、「森の男」とあだ名をつけて、ミレエをばかにした。しかし、「森の男」の精力と情熱は、作品の上でかれらをぐんぐんひきはなしていった。やがて、ミレエは、このアトリエが自分の創造力を自由にのばしてくれる所でないことを知り、ルウブルの偉大な故

人たちに、直接の導きを受ける決意をしてここを去った。

そのころ、かれは一家を構えていたが、ひどく貧しい生活をしていた。一きれのパンさえない日もあるといった、みじめな生活であった。しかも、そうした生活が十年も続けられた。人のこのみに応ずる絵とか、肖像画などを書くことに追われて、ほんとうの自己を表現する絵をかくひまがないほどであった。

かれは、かねてからバルビゾンという村に移住したいと思っていた。それは、パリの東北三十四マイルほどの、フォ

ンテンブロオの森のほとりにあった。バルビゾンは生活費が安い上に、上品な土地だと聞いていたからである。少しばかりのまとまった金を手にしたかれは、家族をひきつれて移って行った。そこには、かれと同じように理想の地を求めて、ルッソオ、ジアズなどの画家も集まっていた。かれらと深く結び合って、ミレエは死ぬまでここでくらした。ミレエのほんとうの制作時代はここで展開された。しかし、その生活は決して楽なものではなかった。ただ、かれが青年になるまでの日を送った田園の空気、森の静けさ、かざりけのない農民の心が、かれをひきつけてはなさなかった。かれは農民を深く愛し、かれらと共に生活し、貧しさと戦いながら画業にはげんだ。

真の芸術家には、いつか人々の無理解の雲をはらいのける日が来るものである。しかし、それはあまりにもおそすぎた。サロンの審査員となり、政府から大きな壁画を依頼されたかれは、歓喜と希望をもってその構想にふけり、下絵に着手したが、病のためおしくもたおれてしまった。一八七五年一月二十日である。

かれが日ごろから好きで写生をしていた、バルビゾンの近くの古い教会のかたわらにほおむられた。

よし子　すると先生、この絵の教会がそこなのですか。

先生　そうだよ。よくごらん。そう思って見ると、いっそう深い感じがするだろう。

久　そうですか。——ミレエの生命が、この絵の中にとけこん

ているわけですね。

正雄　「晩鐘」は、今、どこにかざられていますか。

先生　パリの、ルウブル美術館だよ。

正雄　では、ミレエを導いてくれた、えらい画家たちといっしょにならべられているのですね。

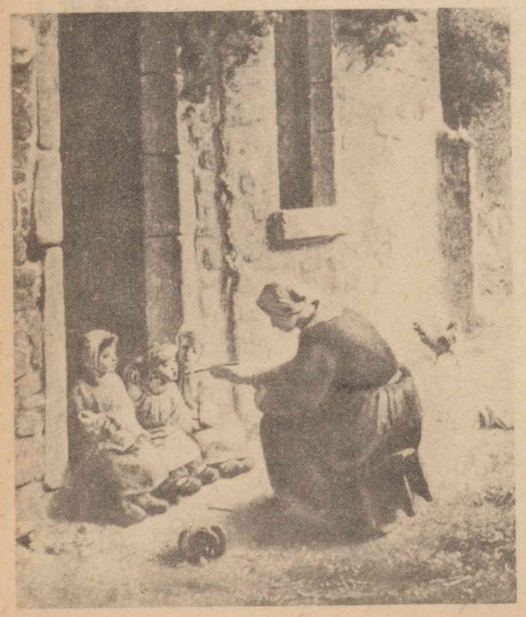
先生　そうだ。自分の座席が、かれの尊敬する偉大な画家たちの間に設けられているのも知らずに、この世を去ってしまったのだ。この「晩鐘」は、かれが二千フランで買手をさがすのに骨折ったというのに、死後十四年目には五十五万フランにまでのぼり、一時はアメリカにわたったが、関税の問題で折合いがつかず、六か月ほどしてから八十万七千フランでフランスに買い返されたのだ。

一同　わあ。

先生　偉大な芸術家の中には、存命中に作品の価値が認められないで、苦難な生活の中にたおれていった人がたくさんいる。富や栄誉にこだわらず、ひとすじに真実に生きぬいたからだ。ミレエなどもそのひとりだよ。

よし子　バルビゾンにいた画家たちは、どうなりましたか。

先生　「バルビゾンの画派」といわれ、ルッソオ、ジアズ、ミレエ、コロオ、ジュプレなど、今日でも美術史



上、重要な位置をしめているよ。

久　ミレエは、農民ばかり書いていたのですか。

先生　バルビゾンにいってからは、ほとんど農民ばかりで、それが世界的名画となっている。パリの宮殿(でん)よりすきな、「バルビゾンのわらぶき小屋」と、かれはいっているほどだ。これが有名な「落ちぼ拾い」や「農夫の妻」などだ。あとでゆっくりごらん。ミレエの絵には、農夫の人間性と共に、土そのものの心、人間と同じように、生命と精神とをもった土がえがかれているから。

定男　きょうの話しあいのようにして、ほかの芸術作品も学習してみたいなあ。

よし子　先生、この次は「しばい」の作品について学習させてください。

先生　よかろう。よし子さんが、ミレエの絵からかねの音が聞えるような気がするといったが、自分の心のかねの音を聞いたのだね。つまり、芸術作品に深くふれていくことは、それだけ、真実の自己を見いだすことになるのだと思う。そんな気持で、「しばいの作品」も勉強してみよう。

学習の仕方

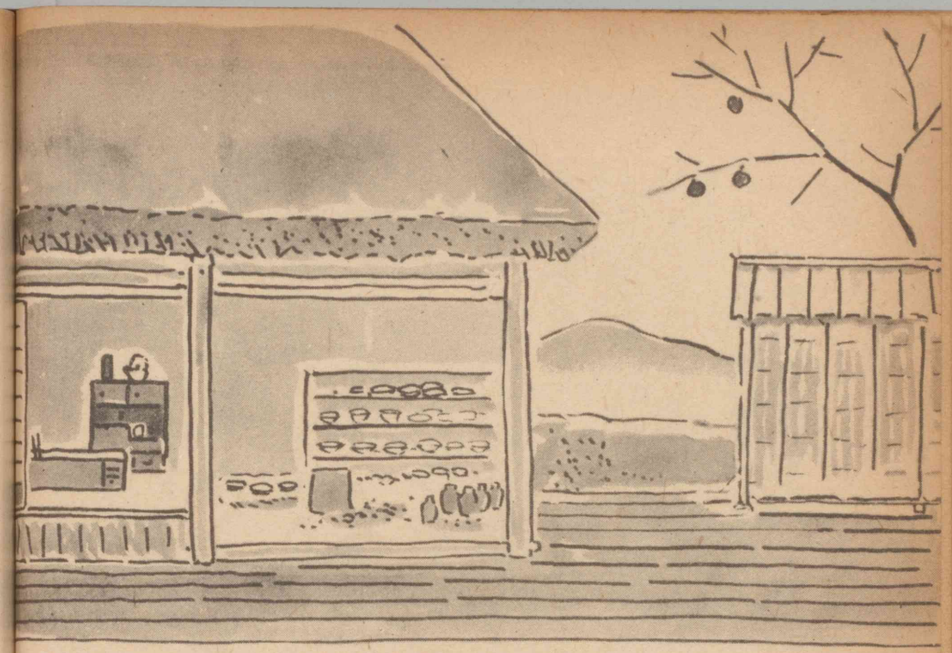
一　話しあいをする人たちの、ものの見方、考え方について、気をつけながら学習しましょう。

二　会話を通じて、つまりどんなことが語られているのか、まとめて書いてみましょう。

三　ミレエが「真実に生き」ていると思われるところを書き出してみましょう。

四　さし絵「落ちぼ拾い」「農夫の妻」について、会話をしてみましょう。

五　「世界の名画」を話題として話しあいをしてみましょう。



(二) さらの色

人

喜三右衛門（有田の陶工　五十才）
姓は酒井田。後に改名して柿右衛門と称し、代々その名をついだ。江戸時代すでに海外に知られ、赤絵の磁器では世界第一流とまでいわれた人である。

吉助（陶器問屋有田屋の番頭　三十才）

茂兵衛（喜三右衛門の友だち　五十二才）

しのえ（近所のむすめ　六才）

所

有田の喜三右衛門の家

時

ほぼ三百年前、晩秋のある日

—しのえのまりつき歌が聞える。まくがあく。

陶工喜三右衛門の仕事場。下手に寄った方にわらぶきの平屋建。家の中は、下手がそまつな小ざしき、上手が仕事場の土間。小ざしきには古い長火ばち、茶だんすなど。

仕事場には、薬のつぼ・さら・作りかけの磁器などが雑然と置いてある。後のたなにも、いろいろな磁器がならべてある。

家から少しはなれた上手に、板屋根の小さな小屋がある。この中に磁器を焼くかまがあるのだが、見物からは見えない。小屋の後にかきの木があって、うれた実が三つ四つ残っている。

やしきのまわりは低い土べい。その向こうに有田の山が見えている。

小ざしきの上がりかまちに、吉助がこしをおろしている。喜三右衛門がかま場から土間の仕事場に帰って来る。

吉助　どうだね、喜三右衛門さん、今の話は。

喜三右衛門　え、なんの話。

吉助　なんの話だって、――あれほど、口をすっぱくして説明したのに。

喜三右衛門　ああ、そうか。清国やオランダ国がどうだとか――。

吉助　やれやれ、こまった人だ。仕事熱心もいいが、少しは私の話にも耳をかしてもらいたいね。さっきからなんべんもいっているとおり、これはおまえさんや、有田屋だけのことではなく、日本の磁器が外国にいくかいかぬかの境目だ。

喜三右衛門　ほう、それはそれは――。

吉助　しようがないね。今ごろ乗り出したりして――。いいか

い。長崎にきている清国やオランダ国の貿易商人に、日本の磁器に目をつけて取引したいといっている者がいるのだ。そこで、うちのだんなが、まだ見本を届ける事に話を決めておいでなさった。見本といっても、何しろ、相手が外国だから、有田じゅうの陶工に思う存分うでをふるってもらい、新しい品物をそろえて出そうというわけだ。

喜三右衛門　なるほど、それはおもしろい。

吉助　それでは、喜三右衛門さんも作ってくれるかい。

喜三右衛門　やりましょう。

吉助　やれやれ、これで私もほっとした。なんといっても名人のおまえさんが力をかしてくれなければ、有田屋の顔も

たたないからねえ。ところで、話は急ぐのだが――。

喜三右衛門　吉助さん。確かに約束はする。しかし、今ではないよ。

吉助　なんだって。そ、それでは約束にはならない。見本を納めるのは、おそくても来月――。

喜三右衛門　いいから、ご主人にいってくださいよ。いずれ、喜三右衛門は赤絵の磁器を、日本の港から積み出してみせます、とね。

吉助　また始まった。その赤絵ができさえすれば、陶器屋は苦労しないよ。喜三右衛門さん、研究は研究、一生かかってもらおうとさしつかえないが、今の話は一日も急ぐのだ。できるかできないか、わかりもしないものを、待っているわけにはいかないよ。

喜三右衛門　できる、きっと作ってみせる。

吉助　（わらって）全く世間でいうとおりだ。喜三右衛門さん、（頭をさして）ここのところが少しへんだぞ。おまえさんの赤絵のゆめなど、だれひとり信用するものか。みんながかげで舌を出してわらっているのを知らないのか。

喜三右衛門　なんといわれてもいい。だがな、吉助さん。ちょっとあのかきの色をごらんよ。絵師ならば、あの色をそのままに絵絹にうつすことができるのに、陶工はそれもならず手をつかねているのだ――。おまえさんも有田屋の番頭さんだ。この気持がわからぬはずがあるまいに――。

吉助　喜三右衛門さん、きょうはそんな説教を聞きにきたのではない。――どうあっても見本は作らないつもりか。日

ごろおせわになっている有田屋に、いやな思いをさせようというのか。

喜三右衛門、それには答えず、かま場にはいる。吉助、あわてて入口まで追っていく。

吉助　（小屋の中の喜三右衛門に）喜三右衛門さん、待っておくれ。今のは私のいいすぎだ。たのむから見本のことは聞きとどけてくれ。なあ、喜三右衛門さん。有田じゅうの陶工たちが、みんな喜んで承知したことだ。何もおまえさんひとりだけ反対することもあるまい。それに、おまえさんの作った見本が、先方の気に入りさえすれば、大判小判は望みのままだ。

喜三右衛門（小屋の中から声がして、）金銭ずくではない。赤絵ができるまで、この仕事から手をはなさせないでくれ。

吉助　こんなに貧ぼうしているのに、これほどの仕事をことわるつもりか。破れ家に住んでいたいのか。妻子をこまらせるつもりか。喜三右衛門さん、考え直してくれ、たのむ。拝む。有田を生かすも殺すもおまえさんのむね一つだ。

喜三右衛門……。

吉助　ええ、このがんこじい。もうたのまない。だれがたのむものか。名人とお世辞をいえばいい気になって、——そんなことだから、だれひとり寄りつかなくなるのだぞ。

そこへ茂兵衛がきくのはち植えを持って上手から出て来る。

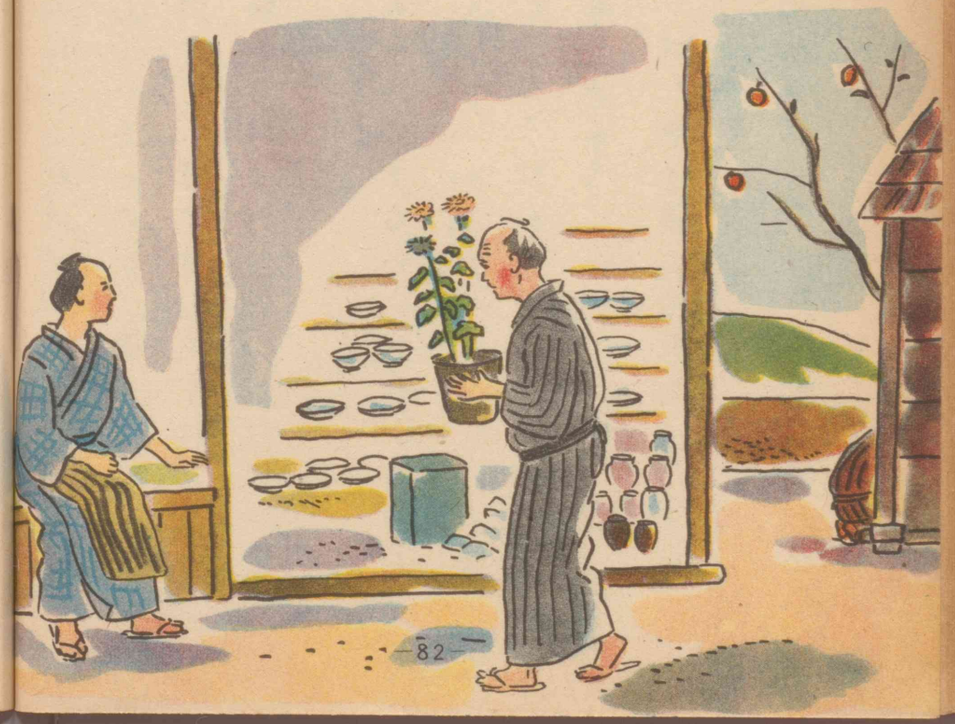
茂兵衛　どうした、有田屋のわかい人。何をそんなにおこっていなさる。

吉助　これがおこらずにいられるものか。これから先、どんな

ことがあろうとも、有田屋のしきいはまたがせないから、そのつもりでいるがいい。

茂兵衛　これは、これは。で、それは喜三右衛門の赤絵ができてもかな。

吉助　できるものか、赤絵が。できたところで——（といいかけて、声を落し）茂兵衛さん、いったいおまえさんはどう思っていなさる。



茂兵衛　さて、それはわしにもわからない。しかしなあ、番頭さん。できようができまいが、あれほど研究に命をうちこんでいる喜三右衛門だ。できあがってほめることはだれにもできる。なかまから見はなされるまでに苦労している時、はげましてやるのが、まあ、今のわしの気持といったところだ。（といいながら、きくを庭に置いたまま、上がりかまちにこしをかける。）

吉助　それもそうにはちがいないが、はて、こまったことだ。思い直してくれさえしたら——。そうだ、もう一けんまわって、それから出直して来ることにしよう。茂兵衛さん、あとで喜三右衛門さんから話があるだろうが、よろしくロぞえたのみます。

吉助、茂兵衛に頭をさげて下手から去る。喜三右衛門小屋から出て来る。

喜三右衛門（茂兵衛に気がついて、）よくきてくれたな茂兵衛。ほう、これがいつかの約束のきくか。なるほど、じまんしていただけあってりっぱなものだ。この色が出せたらなあ、茂兵衛。

茂兵衛は、われた磁器のかけらを手にして、ものもいえないような気持で立っている。喜三右衛門がそれに気がつく。

喜三右衛門みつけたな、かくしておいたのに——。（とわらう。）

茂兵衛　こ、この色は——。

喜三右衛門この前のかまで、やっとそこまでこぎつけたのだが、まだまだ本物ではない。

茂兵衛　やった、やった。おめでとう、喜三右衛門。

喜三右衛門おめでとうは、まだ早すぎる。どうやら、火かげんがわ

かったから、これからが楽しみだ。

茂兵衛　これを、どうして有田屋の番頭に見せてやらなかったのだ。

喜三右衛門有田屋どころか、まだ妻や子にも見せてはいない。これぞと思うものができないうちに人に見られ、これが赤絵きちがいの喜三右衛門の作かといわれたくないのだ。

茂兵衛　そうか、それでわったのか。/だが、ここまでくればもう一息だ。おまえのおとうさんが生きていたら、さぞ喜ぶだろうになあ。

喜三右衛門そうだ。あの俳句のすきな父親が、何を思ったのか、私を竹原五郎七様に預けて、陶工の道を歩ませてくれた。あれから三十年、どうやら、お師しょう様にも、父親に

も、ご恩報じができそうだ。

ふたりが、だまって考えにふけっているところへ、まりを持ったしのえが上手から来る。

しのえ　おじさま。

喜三右衛門　しのちゃんか、さあ、おいで。茂兵衛。たずねてくれる人もめっきり減ったこのごろ、しのちゃんだけは、毎日きてくれるよ。

茂兵衛　いいおじさまだからなあ。

しのえ　おじさま、きょうはなんの話をしてくださる。

喜三右衛門　さて、何がいいかな。そうだ、きょうは、しのちゃんにもいいものが見せてあげられそうだ。茂兵衛、ぼつぼつ、かまをあける時間だ。

茂兵衛　そうか、それはいい時にき合わせた。

喜三右衛門　かまをあけるとなると、かまに近づくのがおそろしくなる。五十になっても、初めてさらを焼いた、子ぞう時代の気持に帰ってくるからふしぎだ。

喜三右衛門は、立って静かにかま場にはいる。茂兵衛が、小屋の柱に手をかけて中をのぞきこむ。しのえが歌いながらまりをつき始める。

しのえ　ぼたん、しゃくやく、
けしの花。
一えだ折っては、かみにさし、二えだ折っては、こしにさす。三え

だ折っては、日がくれる——。

一まいのさらを竹ばさみで持った喜三右衛門走り出てきて、じっとそれをみつめる。

茂兵衛　どうだ、喜三右衛門。

喜三右衛門、それには答えず、さらを仕事場の台の上に持ってくる。茂兵衛がそれをのぞきこむ。はげしい感動に、ふたりは顔を見合わせる。

喜三右衛門で、できた、できたぞ。

茂兵衛　……。

喜三右衛門この色だ、この色だ。

茂兵衛　（思わず喜三右衛門の両かたをつかんで、）喜三右衛門。

しのえ　（さらを見て、）まあ、きれいな色。まるで。おさらに赤い花びらが散っているようね。

喜三右衛門そうだ。これからは、花の色でもなんでも焼きつけるこ

とができるぞ。

茂兵衛　こんどこそ、おめでとうといわせてもらおう。

喜三右衛門ありがとう、ありがとう。

そこへ、有田屋の吉助、上手から顔を出す。

吉助　喜三右衛門さん、さきほどはどうも——。

茂兵衛　番頭さん、もう、くまのいをなめたような、にがい顔をしなくてもよさそうだよ。（とわらう。）

吉助　えっ、（と、近づいて茂兵衛のさすさらを見る。）あっ、赤絵、（とさけんで、あわてて両手でつかむ。熱いので飛びさがって両耳をつかむ。）熱いっ。

見ていた三人わらう。

吉助　赤絵だ、赤絵ができた。（とさけんで、茂兵衛をおしのけるようにしてさらに見入るが、また、）あつっ、つっ。（と両手に息をふきかける。）

喜三右衛門　吉助さん、約束どおり、見本は赤絵の磁器ときまったぞ。

吉　助　ありがたい、ありがたい。

吉助喜びながら、両手をふって熱さをわすれようとする。そのようすがおかしいので一同、またわらいだす。吉助もわらいだす。

喜三右衛門、しのえの頭をなでながら遠くをじっと見る。

――まくがしまる。

学習の仕方

一　これまでのしばいとどんなところがちがうでしょう。読みを中心に学習しましょう。

二　題材、人物、すじ、せりふ、ぶ台などについて心をくばりながら学習しましょう。

三　「かねの音」を参考に、この作品について会話をしましょう。

四　この作品のどんな点が真実に生きたことになるのでしょう。

五　「かねの音」「さらの色」を中心に「真実に生きる」態度について話しあいましょう。

四　新生

ある夜、クリストフの住んでいる小さな町に、有名な音楽家がきて演奏会を開いたことがある。流星のように通り過ぎていったこの音楽家は、クリストフに動かし難い影響をあたえた。まだ、六才の少年が、自分でも作曲してみようと決心したのは、この生きた手本に学んだためであった。じつをいうと、かれはずいぶん前から作曲していたのだが、自分ではそれに気がついていなかった。

音楽家の心にはすべてが音楽である。ふるえ、ゆらぎ、はためき、照りかがやく日、風の夜、流れる光、星のきらめき、夕

立、小鳥の歌、虫の羽音、木々のそよぎ、ストーブの音、戸のきしみ、夜の静けさの中に動脈をふくらます血液の音、――すべてが音楽である。それが、クリストフの心にひびくと、みな美しい音楽に変った。かれはいつも歌っていた。しかし、だれもそれに気づかなかった。かれ自身も気づかなかった。

ある日、祖父の所で、かれはおなかをつき出してそりかえり、足拍子をとりながら、へやをぐるぐるまわっていた。自作の曲を歌いながら、気持が悪くなるほどまわっていた。ひげをそっていた祖父は、石けんだらけの顔を向けていった。

「何を歌っているんだい。」

クリストフは知らないと答えた。

それから数日後のこと、クリストフは周囲にいすをまるくな

らべて、しばいにいった時の、きれぎれのきおくをつなぎ合わせて喜歌劇を演じていた。まじめくさったようすで、テーブルの前にかかげてあるベートーベンの肖像に、ダンスの歩調や敬礼をやって見せていた。くるりとふり向くと、半開きのドアの間から祖父の顔が見えた。クリストフはきまり悪そうにそれをやめて、まどにかけ寄って何かにみとれているふりをした。

それから一週間たって、クリストフがそのことをすっかりわすれてしまったころ、祖父は意味ありげな顔で、かれに見せるものがあるといった。そして、つくえの中から、一さつの楽譜帳を取り出し、ピアノの台に乗せて、ひいてごらんといった。クリストフはこまったが、どうにかこうにか読み解いていった。楽譜は、祖父が自分で肉太く書いたものだった。祖父はそばに

すわってページをくってやっていたが、やがて、これはなんの音楽かとたずねた。クリストフはひくのにむちゅうになっていたので、なんだかわからなかった。

「よく気をつけてごらんよ。わからないかい。」

そうだ、確かに知っているとは思ったが、どこで聞いたのか覚えがなかった。——祖父はわらった。

「考えてごらんよ。」

クリストフは頭をふった。

「わかりませんよ。」

じつは、うすうすわかってきていた。「どうもこの曲は——。」と思い当るものがあったが、そうだとはいえなかった。自分のだとは、どうしてもいえなかった。

「わかりませんよ、おじいさん。」

かれは、顔をあからめた。

「自分の曲だということがわからないのかい。」

「ああ、おじいさん。」

老人は顔をかがやかしながら、音譜の説明をしてやった。

「火曜日に、おまえがとこの上でころがって歌っていたのは、これだ。先週、もう一どやってごらんといったのは、この行進曲。いすの前でおどっていたのは、この三拍子曲だ。」

楽譜の表紙には、みごとな花文字で、こう書いてあった。

「おさなき日の快楽——アリア・マーチ・ワルツ・ミニュエット——ジャン・クリストフ作品1」

クリストフはまぶしかった。自分の名、りっぱな表題、大き

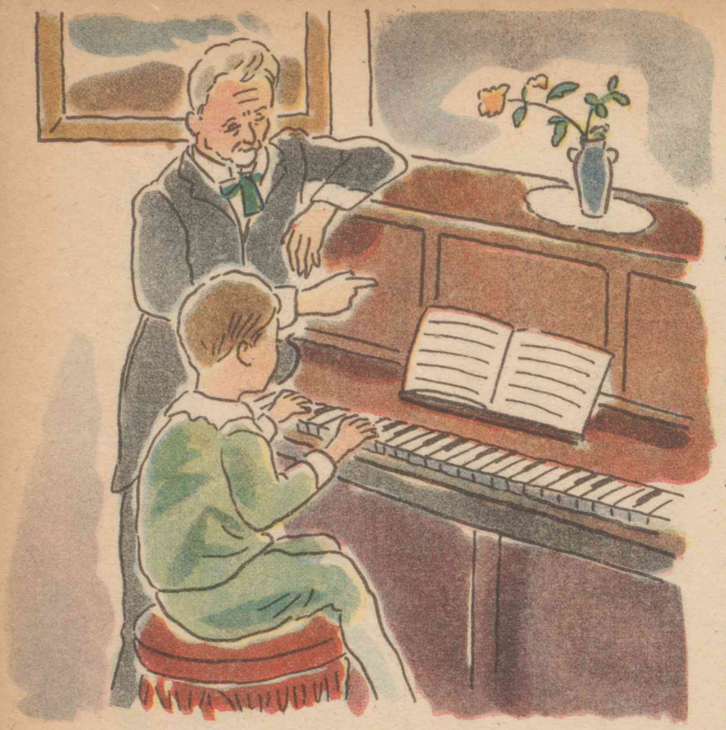
な楽譜帳、自分の作品、かれは口ごもっていった。

「ああ、おじいさん、おじいさん。」

老人はかれをだきよせた。クリストフは祖父のむねに顔をうずめた。うれしさに赤くなっていた。祖父は孫よりもうれしかったが、わざと平気な声で――感動しすぎているのを自分でも気づいていたから、――いった。

「もちろん、わしが伴奏をそえたし、また、歌も調子よくなおしておいた。それから――（老人はせきをした）、三拍子曲には中間奏部も加えた。なぜって、そういう習慣だからな。それに、とにかく、悪くなったとは思わないよ。」

老人はその曲をひいた。――クリストフは、祖父といっしょに作曲したことが何よりも得意であった。



「でも、おじいさんのなまえも入れなければ――。」

「それにはおよばない、おまえより外に知らせる必要はないのだから。ただ、（ここでかれの声はふるえた）ただ、あとで、わしがもういなくなった時、おまえはこれを見て、わしのことを思いだしてくれ。いいかい。わすれはしないね。」

老人はしまいまでいえなかった。かれは、後の世に残ると思われる孫の作品の中に、自分の曲を入れておくという、罪のない楽しみを制することができなかっ

た。今から想像される孫の光栄にあずかりたいという老人の願望は、ごくつつましい、あわれなものであった。自分のすべてが消失してしまわないように、思想の一きれを、名もつけずに残しておくだけで満足であった。

老人は、なお強く孫をだきしめていった。

「ね、覚えていてくれるね。やがて、おまえがりっぱな音楽家になり、えらい芸術家になって、一家のほこり、芸術の光栄、祖国の名誉となった時、おまえは思いだしてくれるだろうね。最初におまえの天才を見ぬき、えらくなるのを予言したのは、この年とったおじいさんだったということをね。」

その日以来、かれは作曲家になったと思った。さっそく作曲にとりかかった。まだ、ろくろく文字も書けないのに、家計簿

をちぎりとっては、いろいろな音符を書きつけた。自分の思っていることを音で書き表わすために、あまり骨折ったので、何を考えているのか、わけがわからなくなってしまうようなこともあった。音楽の天分が豊かだったので、まだ、なんの意味ももたないものではあったが、作曲を続けた。

やっとできると、得意になって祖父の所へ持っていった。祖父は年とったせいか、なみだもろくなっていたので、いつもなみだを流しては、すばらしいできだといってほめた。

そんなふうに、クリストフはあまやかされて、もう少しでだめになるところであった。が、幸にも、かれは生れつきかしこい性質だったので、ある男の感化によって救われた。

その男というのは、他人に感化をあたえるなどとは自分でも

思っていなかったし、だれが見ても平凡な人間だった。――それは、クリストフの母親ルイザの兄、ゴッドフリードであった。

かれはルイザと同じように小がらで、やせて、貧相で、少しねこぜだった。四十ぐらいなのに、見たところ五十以上にも思われた。しわのよった小さな顔は赤みがかって、人のよさそうな青い目をしていた。すき間風がきらいで、どこでも寒そうにぼうしをかぶっていた。が、そのぼうしをぬぐと、まるいはげが見えた。クリストフと弟たちは、それをおもしろがって、かみの毛はどうしたといってからかった。すると、おじはまっ先にわらいだし、少しもおこらなかった。

おじは、香料・紙類・菓子・ハンケチ・小歌集・薬類などをせおって、村から村へとわたり歩いている行商人であった。家

の人たちは、なんども、小間物屋でも開いて土地におちついてはどうかとすすめたが、かれはこしをすえることができなかった。

ある夜、入口に人の気配がした。ドアがあいて、小さなはげ頭といっしょに、善良な人間らしい、おずおずしたほおえみをうかべて、ゴッドフリードが現われた。

「みなさん、こんばんは。」

といって、ていねいにくつをふいてはいった。それから、年順にあいさつをして、一番下の席にそっとすわった。

祖父と父は、この小さな男をばかにしていた。時には、ルイザが顔をまっかにするほど、ひどいじょうだんを浴びせかけたりした。しかし、かれはいつも敬意をもって、義父と義弟に対

していた。ルイザはこの兄を心から愛していたし、兄も妹を、口には出さないでも尊敬していた。身寄りのない不幸な兄妹は、それだけに、あわれみのひもでかたく結ばれていた。

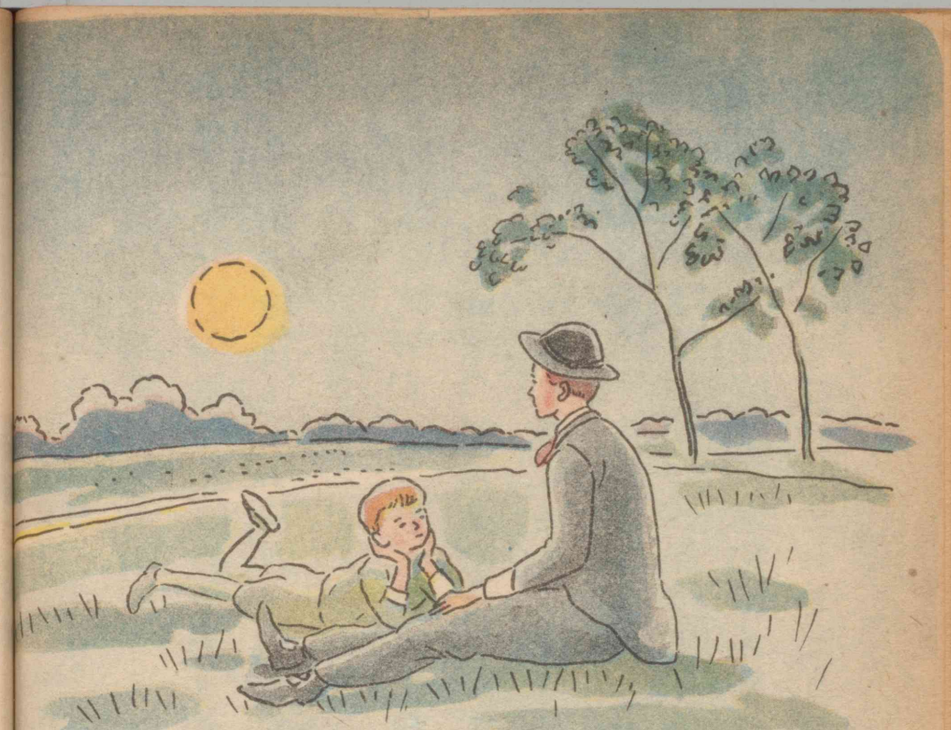
クリストフは、子どもによく見られる思いやりのない軽卒さで、父や祖父のまねをして、この小さな行商人をばかにしていた。こっけいな、おもちゃかなんかのようにおもしろがったり、悪ふざけをしてからかったりした。おじは、平気でそれをがまんしていた。

でも、クリストフは、なんとなくおじがすきだった。まず、じぶんの思うままになるのがすきだった。それに、おみやげを買ってきてくれるからすきだった。かれは貧しかったけれども、どうにかして、みやげを持ってきてくれた。家の人の祝い日を

わすれることも決してなかった。きっとやってきて、心をこめて選んで買ったいいおくりものを、ポケットから取りだした。だれも、お礼をいうのをわすれるほどそれに慣れきっていた。かれの方でも、おくりものをするだけで満足していた。

クリストフはねむれない夜など、昼間のでき事を思いかえしてみるくせがあった。そんな時に、この親切なおじのことを考えて感謝と同情の念にうたれることがあった。しかし、昼になると、もう、おじをからかうことばかり考えていた。善良の価値のわからない人たちには、善良とばかは同じ意味に思われるものであるが、ゴッドフリードはその生きた例のようであった。

ある日の夕方、父がるすで、ルイザはふたりの弟をねかしていた時、階下のへやにひとり残っていたおじが、家の近くを流



れている川岸に出ていった。クリストフもついていった。そして、小犬のようにもつれながら、おじをいじめたてた。息切れがしてつかれると、草の中にはらばいになり、草に顔をうずめながら悪口を考えだして、大声でいってやった。

なんの返事もしないので、ふと見ると、おじの顔は夕もやに消えかけている夕日にかがやいていた。かれは半ば目をつむり

口を少し開いたままほおえんでいた。クリストフは、ことばがのどにつかえるような気がした。不幸になやみきったかれの顔には、なんともいえない誠実さがただよっていた。クリストフはほおづえをついて、じっとかれを見守っていた。夜がやってきた。ゴッドフリードの顔は少しずつ消えていく。あたりはひっそりとしている。おじの顔にうかんでいる神秘的な感じに、クリストフはおどろかされた。クリストフは、気がぼうっとしてきた。草むらではこおろぎがないていた。川の中でさざなみがささやいていた。

不意に、暗い中でゴッドフリードが歌いだした。むねの中にひびくような、くもった弱い声で、二十歩もはなれたら聞えないであろう。——けれども、その声には人の心をそそるような

真心がこもっていた。クリストフは、こんな歌いぶりを聞いたことがなかった。また、そんな歌も聞いたことがなかった。

ゆるやかな単純な歌で、重々しく、さびしげに、決して急がずに進んでいく。時には、しばらく休んで、――にわかに高い調子になり、いきつく先もかまわずに進んでいき、暗やみの中に消えていく。――それは、はるか遠い所からやってくるようでもあり、どこへいくかもわからなかった。ほがらかな中になやましさがこもっていた。外からみる安楽のかげに、長い年月のなやみがひそんでいた。クリストフは感動のあまり、息つくことも、からだを動かすこともできないような気がした。

「おじさん。」

ゴッドフリードは返事をしなかった。クリストフはほおづえ

をし、ひじをかれのひざにのせてくりかえした。

「おじさん。」

「なんだい。」

ゴッドフリードは、やさしい声でいった。

「なんの歌なの。おじさんの歌ったのは。」

「知らない。」

「なんだか教えてよ。」

「知らないよ。歌だよ。」

「おじさんの歌かい。」

「わしの歌なんてあるものか。――古い歌だよ。」

「だれが作ったの。」

「わからないね。」

「いつできた歌なの。」
「わからないね。」
「おじさんの小さい時分のかい。」
「もっと前だ。生れる前、わしのおとうさんの生れる前、おとうさんのそのおとうさん、また、そのおとうさんの生れる前だ。この歌はいつでもあった。」
「へんだなあ。だれからも、そんな話を聞いたことがないよ。」
かれはちょっと考えた。
「おじさん、まだ、ほかの歌を知っているかい。」
「ああ。」
「もう一つ歌って。」
「なぜ、もう一つ歌うんだい。一つでたくさんさ。歌いたい時

か、歌わなくてならない時に歌うものだ。なぐさみに歌うものじゃない。」
「でも、音楽をつくる時はどうなの。」
「これは音楽じゃない。」
少年は考えこんだ。よくわからなかったけれども、説明は求めなかった。なるほどそれは音楽ではない、ほかの歌のように。
「おじさん、おじさんは歌をつくったことがあるの。」
「歌。どうしてつくるのさ。歌はつくるものじゃないよ。」
少年は、いつもの論法でいい張った。
「でも、一どはだれかがつくったにちがいないよ。」
おじは、頭をふってきかなかった。
「なぜつくるんだ。どんなのだってあるんだよ。悲しい時のも

あれば、うれしい時のもある。つかれた時のもあれば、遠い家のことを思う時のもある。自分をまるで虫けらみたいにいやしい人間だと思ってさげすむ時の歌も、人から親切にされてなきたい時の歌もあるんだ。天気がよくて、いつも親切にわらいかけてくださる神様の大空が見えるので楽しい時のもある。どんな歌だってあるんだ。なんで、ほかの歌をこしらえる必要があるものか。」

「えらい人になるためにつくる必要があるよ。」

クリストフはいった。かれの頭は、祖父の教訓と子どもらしいゆめでいっぱいであった。ゴッドフリードは やさしくわらった。クリストフは、少しむっとした。

「なぜわらうんだい。」

くってかかるようにいった。

「ああ、わしは、わしはな、くだらない人間さ。」

おじは、やさしく少年の頭をなでながらきいた。

「おまえは、えらい人になりたいんだね。」

「そうさ。」

クリストフは得意気に答えた。おじはほめてくれるだろうと思った。しかし、ゴッドフリードはききかえした。

「なんのためだい。」

クリストフはまごついた。しばらく考えてからいった。

「りっぱな歌をつくるためだよ。」

ゴッドフリードは、またわらった。そして、いった。

「えらい人になるために、歌をつくりたいんだね。そして、歌

をつくるためにえらい人になりたいんだね。それじゃしっぽを追っかけてぐるぐるまわっている犬みたいだ。」

クリストフはひどく気にさわった。いつもばかにしていたおじから、あべこべにひやかされたので、がまんができなかった。りくつでやりこめてくるほど、りこうなおじだとは思いもよらなかった。クリストフは、やりかえしてやる悪口や議論を考えたが、思い当らなかった。ゴッドフリードは続けていった。

「おまえが、なんマイルもあるほど大きな人間になったところで、たった一つの歌だってつくれっこないよ。」

「つくろうと思っても。」

「思えば思うほどできないのだ。歌をつくるには、あんなにならなくてはだめさ。お聞き——。」

月が野のむこうに上って、まるくかがやいていた。銀色のもやが、鏡のような水面にただようていた。かえるが語りあい、牧場では、がまたちが美しい音色のふえをふいていた。こおろぎのふるえ声は、星のまたたきにこたえていた。

風は静かにはんの木のえだにそよいでいた。川のむこうのおかからは、夜鳴く鳥のかすかな歌が流れていた。

「おまえがどんな歌をつくろうと、ああいうものの方が、ずっとりっぱに歌っているじゃないか。」

クリストフは、今までにないしみじみとした気持で、この夜の音楽に耳をすました。かれは、やさしさと悲しさで、むねがいっぱいになるような気がした。牧場を、川を、空を、星を、むねにだきしめたかった。そして、すべての人のうちで、ゴッ

ドフリードが最もよく、最もかしこく、最もりっぱに思われてきた。おじがなつかしく、そして、気の毒になってきた。クリストフは、いきなりゴッドフリードのうでに飛びこんでだきしめた。

おじは、帰りにいった。

「また、いつか、自然の声を聞きにいこう。ほかの歌も歌ってやろうな。」

それから、ふたりは時々散歩に出かけた。ゴッドフリードは草の中にすわって、じっと耳をかたむけた後、雲や星の話をしてくれた。土の音、風の声、水のささやき、飛んだりはねたり泳いだりしている小さな動物たちの声、夜のシンフォニーの数えきれないほどの楽器、それらを聞きわけることを教えてくれ

た。また、悲しい調子やうれしい調子の歌も歌ってくれたが、それは、一晩に一つしか歌ってくれなかった。歌いたい時に、自然に出てくるのでなくてはだめだった。

ある夜、クリストフは、ゴッドフリードに自分の小曲をみせようと思った。かれの苦心の作だった。

ゴッドフリードは、聞き終ってからいった。

「へただなあ。」

「でも、おじいさんは、すばらしいといってほめてくれたよ。」

「おじいさんは学者だからな。——ところが、わしときたら音楽を知らぬものだから、——それにしても、へただと思うな。」

クリストフは他の曲を歌った、ありったけの自作の曲を。

「なお、まずいや。」

クリストフは、くちびるをかみしめた。なきたかった。かれは、なき声でさけんだ。

「では、なぜ、まずいっていうのさ。」

「なぜって、それはわからない。待てよ。うむ、そう、へただ。なってないよ。意味がないじゃないか。なぜ、あんなものを書いたのかい。」

「知らないよ。いい歌をつくりたかったからさ。」

「それだ。だからだめなのだ。えらい音楽家になりたくて、人にほめてもらいたくて書いたのだろう。それは、うその音楽さ。音楽は、もっとけんそんで、誠実な、真情から自然に出なくてはいけない。ちょうど、泉の水がわくように。」

自尊心をきずつけられて、少年はおこった。にくんだ。

「なあに、おじさんなんかに、何がわかるものか。おじいさんの方がえらいんだもの。——だから、ぼくの曲をほめたんだ。」

と、思ってみた。しかし、心の底では、おじの方がほんとうだということがわかっていた。

それから、クリストフは作曲するたびに、おじのいった真情ということをわすれなかった。かれは、作曲してみたものを、おじがどう思うかと、いつもびくびくしていた。たまに、

「そんなにもまずくないね。いいよ。」

などといわれると、うれしくてたまらなかった。

いつも、ゴッドフリードはクリストフにいっていた。

「ね、わかったかい。おまえが家の中で書くものなんか、どれもこれも、音楽じゃないんだ。へやの中に太陽があるかい。

ほんとうの音楽は、家の外にあるものなんだ。」

おさない時に、心に深くきざまれたゴッドフリードの教訓は、作曲するごとに新しく心に生きかえってきた。そして、クリストフはえらい音楽家になることができた。

学習の仕方

一　長い文ですから、文意をとらえるようにしましょう。

二　どちゅうでいくつかに切ったり、深く調べる仕方を考えましょう。

三　ここにえがかれている、三人の人物の性格について考えてみましょう。

四　この文を中心に、「真情」について話しあいましょう。

五　これまでの学習をかえりみ、「話す、聞く、読む、書く」はたらきについて話しあいましょう。

この本全体のことをまとめたり、冬休みの国語学習の計画をたてたりしましょう。

新しいことば

ページ

4 空港　機首　時速　簡素　清純

一条　空路　つらぬ(き)　地中海　古跡

5 機影　とばり　残夢　たより　インド洋

あわし　航程　航空　帯びて

6 たくみ(に)　均整　おさなご　文学　美術

書さい　速力　交わり　教養　反省

7 進度　よどみな(き)　観光　協議

天かける　交わり

8 スエーデン　かたみ　しの(び)　代表的　雄大

スイス　ヨーロッパ　観迎

9 ひどしお　花だん　愛護　武勇　土木工事　大家

出航　予約　人間性　逸話

10 セピア　田園風景　サロン　スイッチ・バック　布地　(五)岳

歩廊　座席　オリーブ　中腹

11 プール　木馬　合唱　なだらか　勢ぞろい　はい景

噴煙　噴火山

バスガール

21 (四)合目　こう配　よう岩
るいるい　高山植物　別天地
パノラマ

22 周辺　水たまり　初秋
茶かっ色　しわ

23 純白　(噴火)口　かげぼうし
地軸

24 ゆ黄　めったに

25 連山

26 各地　うずま(り)　住み(つく)

27 手前　いとし(く)

28 木版画　写真機

29 思いがち　性格　特ちょう
熱意　ともなう
自覚　うなが(され)　個人
風習　人情

31 す通り　愛着　独自
見直して　かけがえ(のない)
無知　しわざ　助言
滞在　貝

32 漁夫　来朝　学科
設置　スケッチ　収め(る)

34 刊行　貝づか　手記
切割　たい積

35 そくざ　永みん　最良
親友

36 帰化　軍医

37 配達　紀行文

38 風物　東海
転任　講師　高等学校
おもかげ　おどぎばなし　そこね(て)
明暗　象ちょう　庭石

39 墓地　宿舎　和服

40

40 きせる　洋館

41 ポルトガル　首府　海軍士官
訪問

42 風俗　本国
老母　公職　失職

43 めと(り)　つかの間　先だ(たれ)
位　総領事　恩給

44 蔵書　たずさえ(て)　固有
一理　晩年

45 ふいちょう　気質
異国情調　文人　わびしい
愛情　紋章

46 横顔　店頭　国民的
典型的　瀬戸物　専門
容器類

47 茶びん　ちょく　茶たく
たんぜん　霊感　店舗
せんす　ちりとり　おけ

48 耕作　かんがい　宿屋
内定

49 なき夫　生がい　追憶
好意

50 あらわな　口ずから
(たえ)難い　影響
領域

51 伝統　洗練　統合体
懸案　三周忌　心理
観察眼

52 著者　専攻
造形面　直感　経営
百考　凡人

53 暗示　原版
安価　功績　模写
図案
心境

54 こく明　ほりわり　立体的
形態　適応
調和　絶大　推進力

55

55 純粋　構成
56 多数　思慕　近郊
57 極地　せんさい　名所
58 選(を異にする)驚嘆　(同)時代
墓前　しゅくぜん　画す(る)
60 名作　一節
61 真心　画面　教会
つつまし(い)　感想
62 せまる　立場
63 人物　ほし草
64 小伝　ゆかしい　品性
祖母　博識　宣教師
65 生計　将来
66 アトリエ　いかな(者)　精力
創造力　故人
67 決意　構えて　肖像画

68 生活費　上品　制作
画業　審査員　依頼
69 無理解　下絵
構想　買手　関税
70 フラン
折合い
71 存命(中)　栄誉
真実　画派　こだわ(らず)
72 重要　名画　宮殿
わらぶき
74 姓　改名
赤絵　磁器　江戸時代
問屋　番頭　陶器
75 平屋建　茶だんす
うれた　上がりかまち　かま
76 すっぱく　清国　境目
77 貿易商人　だんな　見本

陶工　存分
78 来月　ご主人
79 世間　絵師
つかね(て)　説教　絵絹
80 聞きとどけ(て)　先方　気に入り
大判小判　金銭ずく
81 貧ぼう　妻子　がんこ
お世辞　はち植え
82 しきい　またがせ(ない)
83 見はな(される)　思い直(して)　口ぞえ
84 じまん　かけら　こぎつけ(た)
本物　火かげん
85 これぞ　一息　預ける
お師しょう様
86 ご恩報じ　ふけて
87 き合わせ(た)　子ぞう
しゃくやく　けしの花

88 竹ばさみ　かた
89 くまのい　なめ(た)　おしの(ける)
90 まく
91 流星　手本　はためき
92 羽音　きしむ　動脈
足拍子　石けん
喜歌劇　歩調　敬礼
楽譜帳　肉太(く)
95 とこ　行進曲　三拍子曲
花文字　快楽
96 伴奏　せき　中間奏部
習慣　得意
97 後の世　制す(る)
98 願望　消失　思想
満足　予言
99 音符　なみだもろ(く)　あまや(かされて)
感化

100 平凡(はん)　小がら　貧相
ねこぜ　香料(こう)　行商人
101 小間物屋　気配　ドア
善良な　義父　義弟
102 身寄り　あわれみ　思いや(り)
軽卒な　がまん
103 おくりもの　くせ　同情
階下
104 もつれ　息切れ
誠実　ほおづえ　神秘(ぴ)的
105 そそる　つかえる
106 単純　重々し(く)
こも(って)　安楽　なやましさ
108 時分　ひそ(んで)
109 なぐさみ　求め　論法
110 まごつく
112 しっぽ　あべこべ　ひやか(され)

112 りくつ　やりこめ(て)　りこう
113 がま　音色　ふえ
またたき　しみじみ　くやしさ
114 シンフォニー
115 小曲
116 かみしめ(た)　けんそん　真情
泉(いずみ)　わく　自尊心
117 たまに
条(4)　護(9)　辺(22)　拾(31)　刊(34)
俗(42)　刀(53)　制(68)　税(70)　称(74)
貿(77)　届(77)　納(78)　舌(79)　絹(79)
銭(80)　殺(81)　妻(81)　預(85)　孫(96)
慣(96)

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

大火口をいく　石森延男
さらの色　栗原一登

さし絵

関合正明　楢原健三

そうてい

河野鷹思

小国622　新国語　中年六年　新生

昭和二十五年九月十四日印刷
昭和二十五年九月十八日発行

定価四十三円

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE SEP. 14, 1950)

著作者　垣内松三
八木橋雄次郎

発行者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
光村図書出版株式会社
代表者　大江恒吉

印刷者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
株式会社光村原色版印刷所
代表者　光村利之

発行所　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
光村図書出版株式会社

6

中

なまえ

広島大学図書
0130449808

書出版株式会社

文庫
50
808